

肉を食べると

世界中の人が食べる肉の量は毎年増えている。日本でも魚や野菜より肉が好きな子どもが多い。

肉を食べるために、たくさんの動物が飼われている。今、牛や羊や豚、鶏などは世界の人口の3倍もいる。地球の土地の半分は牛や羊が使っているのだ。牛や羊をたくさん飼えば飼うほど、新しい草地が必要になる。それで、草地を作るために、世界中の森の木が切られている。中央アメリカでは1960年から90年までに森の3分の1以上が消えてしまった。森が少なくなると、地球は暖かくなる。

また、いろいろな動物のえさに麦やとうもろこしがたくさん使われる。世界中の麦やとうもろこしの約40%は牛や豚、鶏などが食べている。アメリカでは70%が動物のために使われる。

水やエネルギーも必要だ。アメリカでは1人が1年に食べる肉(112kg)を作るのに、石油190リットルのエネルギーと同じエネルギーが使われている。そして、牛肉を1kg作るのに、3,000リットル以上の水を使う。テキサスやカリフォルニアなど雨が少ない土地で牛を飼うからだ。

ヨーロッパや日本では1kgの肉のために、アメリカ以上のえさやエネルギーが使われる。日本では日本人が好きな軟らかい牛肉を1kg作るために、アメリカの2倍の麦などのえさが使われている。

世界の人口の約20%の人は食べる物が少ない。肉をたくさん食べるのをやめれば、食べる物が少ない人たちに麦やとうもろこしを送ることができる。人と地球を守るために、何をしたらいいか、考えなければならない。

竹取物語

たけとりものがたり

昔、ある所におじいさんとおばあさんが住んでいました。おじいさんは山から竹を取って来て、いろいろな物を作って、売っていました。

ある日、おじいさんは不思議な光を出している竹を見つけて、切りました。中には小さな、かわいい女の子がいました。子どもがいないおじいさんとおばあさんはとても喜んで、女の子に「かぐや姫」という名前をつけて、大切に育てました。かぐや姫はどんどん大きくなって、とてもきれいになりました。

美しいかぐや姫のことを聞いて、男たちが結婚を申し込みに来ました。「どうぞ、かぐや姫と結婚させてください。」おじいさんはかぐや姫に男たちの気持ちを伝えましたが、かぐや姫は結婚したくないと言いました。

しかし、5人の男があきらめなかったので、「わたしがお願いした物を探して来た人と結婚します。」と言って、男たちを遠い国へ行かせました。かぐや姫が男たちに頼んだ物はとても珍しくて、探すのが大変でした。

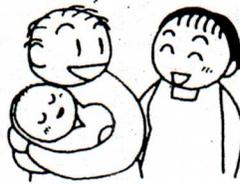
1人はインドへ仏の石の鉢を探しに行きました。1人は東の海にある山へ行って、宝石でできた木の枝を取って来なければなりませんでした。1人は絶対に燃えないねずみの皮の着物を探しに中国へ行きました。1人は竜の首の玉を、1人はつばめが持っている珍しい貝を取って来なければなりませんでした。しかし、3年過ぎても、だれも頼んだ物を持って来ることができませんでした。無理なことをして、病気になっ

人生

では、新郎新婦をご紹介します。

新郎の宝田太郎さんは1971年に京都でお生まれになりました。ことし29歳でいらっしゃいます。1993年にさくら大学を卒業なさって、アップル銀行に入られました。銀行に入られて2年目にアメリカの大学に留学なさいました。学生時代は相撲をなさっていて、料理もお上手だそうです。

新婦の花子さんは1965年にニューヨークでお生まれになり、パリ、ロンドン、モスクワで子ども時代を過ごされました。国際人でいらっしゃいます。ご趣味はいろいろなものをデザインすることで、特に帽子のデザインがお好きだそうです。いつかご自分の店を持ちたいとおっしゃっています。



宝田部長はきょう退職

なさいます。銀行に入られてから25年、

世界中のいろいろな支店にお勤めになりました。働きながら見たこと、考えたこととお書きになり、本を出されました。書きたいことがまだま

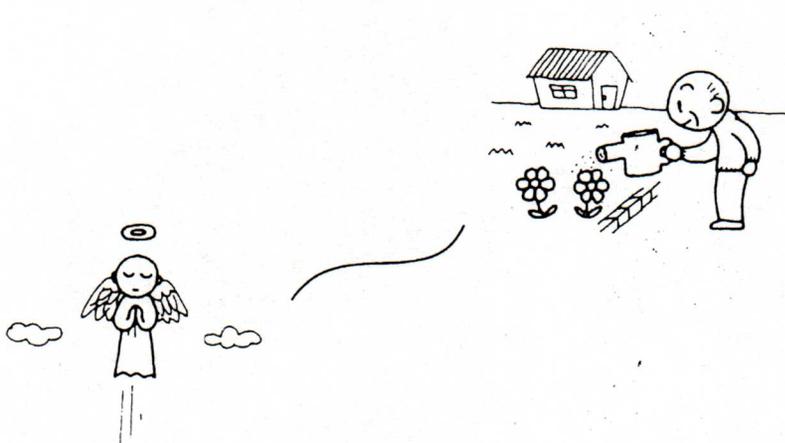
だからので、書く時間を作るために、この度銀行をやめる決心をなさい
ました。デザイナーの花子夫人も賛成なさっているそうです。

宝田さんの新しいご出発をお祝いし、ご成功をお祈りして、乾杯！

宝田君、花子さん、ご結婚50周年おめでとうございます。

「50年」と口で言うのは易いですが、ほんとうに長い年月です。50年間
いろいろなことがあったでしょう。たぶんけんかもなさったと思いま
す。

これからも健康に気をつけて、お二人で
人生を楽しみながら、60周年、70周年を
お迎えてください。乾杯！



宝田さん、どうしてこんなに急にいつてしまわれたのですか。何を話
せばいいか、ことばが見つかりません。たぶん去年先にいかれた奥様に
お会いになりたくて、急がれたのですね。わたしたちはとても寂しいで
すが、宝田さんは今ごろ奥様とお会いになって、いろいろなお話をな
さっているのでしょうか。

どうぞ安らかに眠りください。

消したいもの

「あなたがいちばん消したいものは何ですか。」

鉛筆や消しゴムを作っている会社が日本人1,000人にアンケートをした。いろいろな答えがあった。

いちばん多いのは男の人も女の人も今までにした恥ずかしいことだった。恥ずかしいことを消したいと思う人は100人以上いた。恥ずかしいことの中には、「授業中寝てしまって、寝言を言って、みんなに笑われた。」「学校の大切な式で司会をしたとき、ズボンのチャックが開いていた。」「雨の日に道を歩いていて、マシホールに落ちてしまった。たくさんの人が見ていた。」など、若い人の例が多い。年を取ると、恥ずかしいことがたくさんあって、きっと思い出すのが大変なのだ。

男の人が消したいもので2番目に多いのが銀行や人から借りたお金、3番目が悪い政治家だった。女の人の答えで2番目に消したいのは顔にあるにきびやしみなどで、3番目は体の脂肪だった。学校に通っている子どもたちがいちばん消したいのは学校の成績、次に入学試験、3番目が恥ずかしいことだった。

ほかに「今までの人生」「病気」「年」「失恋」などの答えもかなりあった。また、「禁煙の約束」「主人のゴルフの予定」「結婚の約束をした恋人」「嫌いな課長の髪」など、おもしろい答えもいろいろあった。

何でも消せる消しゴムを発明したら、きっとたくさん売れるだろう。でも、気をつけたほうがいい。「嫌いな人」を消したいと思っている人もいる。

(協力：三菱鉛筆㈱)

た男や死んでしまった男もいました。

天皇もかぐや姫が好きになり、妻にしたいと思いました。何回も手紙で気持ちを伝えましたが、「はい」と言わせることはできませんでした。

そして、また3年が過ぎて、夏になりました。かぐや姫は毎晩月を見て泣くようになりました。

「かぐや姫、どうしたの？」

「わたしはこの世界の者ではありません。月の世界から来たのです。次の満月の晩に月へ帰らなければなりません。それで、とても悲しいのです。」

びっくりしたおじいさんは天皇に「かぐや姫を帰らせないでください」とお願いしました。満月の夜、天皇はたくさんの兵隊におじいさんの家を守らせました。しかし、夜中に家の周りは不思議な光でいっぱいになって、兵隊たちは何も見えなくなりました。月から車が迎えに来たのです。かぐや姫が乗った月の車は空を飛んで行きました。

ところで、かぐや姫は帰るときに、おじいさんたちに贈り物をしました。それは「不死の薬」でした。しかし、おじいさんとおばあさんはとても悲しんで、薬を飲まないで、死んでしまいました。天皇はかぐや姫がいない世界で生きていても、意味がないと思って、高い山の上で薬を焼かせました。それから、その山は「不死の山」から「富士の山」、そして、「富士山」という名前になったのです。